

桐壺 (光る君と輝く日の宮)

訳 坂東 忠義

桐壺 (光る君と輝く日の宮) M-2

語句

※1 御あたりまはり <sup>威</sup> 威

父の帝は第二皇子 (光源氏) がかわい盛りに母や祖母に

死に別れて、かわいそうだと思つていつも自分の身近に侍ら

していた。后の部屋に行くときですら連れていった。いくら

子供かわいさの末の行動といつても、これは行き過ぎ。なお

当時の女性たちは夫以外の男性に姿を見せることはタブーだ

つた。

※2 御方

藤壺宮のこと。彼女の阿親は皇族だったが、相次いでくな

つたので、婚期を迎えた年 (14歳) でありながら独身でいた。

桐壺の更衣を亡くして悲しみに沈んでいる帝に、ある女房が

「亡くなった更衣さまと瓜二です」と彼女の入内を初め

た。彼女は更衣の身代わりとして宮中に迎えられ、帝に寵愛

された。

※3 典侍

帝に長くから仕えている女房の一人。

※4 なづさひ

「まどわりつく。馴れ親しむ。」

光源氏がまだ10歳前後なので、母を慕うように藤壺宮のそば

にまどわりつきだがつている。それが自然に恋に感情に発展

していった。

※5 御仲そばそばしき

弘徽殿女御は藤壺宮のことも気に食わないが、藤壺宮が皇室

の出身なので、表立つていじめることは出来ない。

※6 ちとよりの憎さ

弘徽殿女御は、身分が低いのに帝に偏愛されていた更衣のこ

とがもともと憎くてたまらなかった。更衣をいじめ殺した黒

幕

※7 ものし

「おもしろくない。不愉快。気に食わない。めざわりだ。」

弘徽殿女御は、自分も、子供 (皇太子) も帝からそれほど

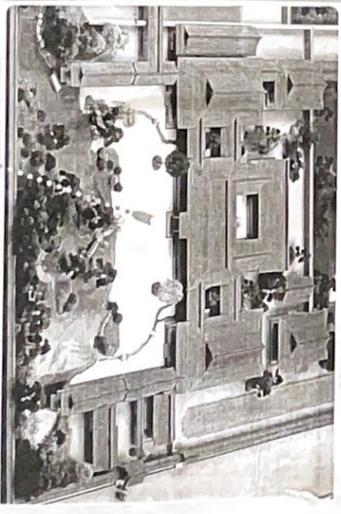
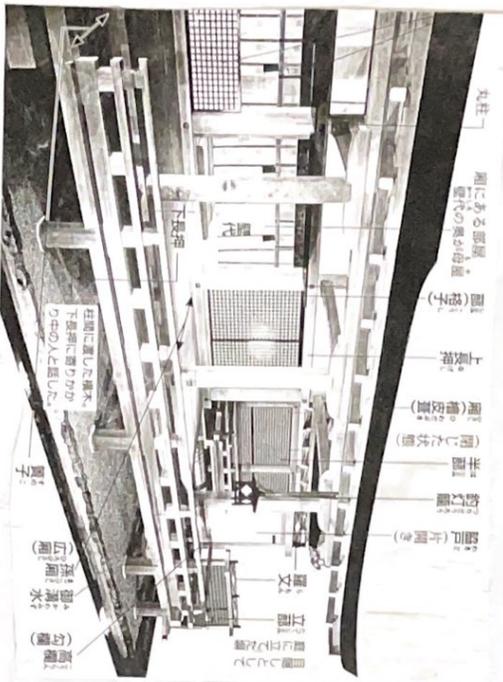
愛されていないのに、第二皇子だけが帝に寵愛され、さらに

藤壺宮と仲良くしているのがおもしろくない。

※8 名高う

世間の貴族たちは「一の皇子 (皇太子)」の周りに集まり、

媚びを売っている。



基本的には定家平  
の部屋は日女性側  
の家系が所有権を  
受け継ぐ、男性は  
ただ住んでいるだけ。

※9 光る君  
「光る」とは当時の美しさの最大級の美的賞賛の言葉。  
「光る」とはどこにか光源があつてそこから光が四方に降り注  
いでいる状態。  
※10 輝く日の宮  
「輝く太陽の宮」「輝く」も最大限の美的賞賛の言葉  
「かぐや姫」も同様。  
「輝く」とはどこにも光源がなく辺り一帯が光輝いている状態。